
液体

オッサン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

液体

【Nコード】

N6306Q

【作者名】

オッサン

【あらすじ】

呪文おじさんと呼ばれる浮浪者から手に入れた『液体』の効果で、誰もが羨む成功を手に入れた私。しかし、その液体も尽きようとしていた。液体が無くなれば破滅しかないと、改めて手に入れようとするが――『くふあ　く　ぶるうぐ　とうむ　ぶぐ　とら　ぐるん』

（前書き）

ご意見やご感想、各種批評、間違いの御指摘などを頂けると嬉しいです。

この作品に登場する地名、人名などの固有名詞は全て、フィクションです。

初めての短編。

原稿用紙ちょうど十五枚です。

短く仕上げるって、難しいですね。

私は成功した。

優秀な成績で国立大を卒業し、二十八になったばかりの若手にも関わらず、超がつく一流の外資で毎日のように数億の金を動かすというやりがいのある仕事を任されている。

私好みの料理を作ってくれる所が気に入り、さほど美しくはない女だが、四歳年下の大学の後輩と結婚もしている。子供はまだないが、それは妻も私も共に仕事が充実しているからだ。月に二回は外泊でデートに行く事から、夫婦仲が順調だとわかってもらえるだろう。

順風満帆だと自他共に認める人生。

だが、一つだけ懸念する事がある。

私がこれらを手に入れるために使ったとある物が、無くなろうとしていることだ。

それは飾り気のない瓶に入れられた、金色の月を閉じ込めたかのような深みのある色の液体だ。

その液体を飲むことによって肉体という殻を離れ、自分の望んだ光景を――過去や未来には及ばないが――自在に見る事ができる。

私はこれを使う事で、あらゆる困難を攻略してきた。

難しい国立大学の試験にほぼ満点で合格することも、リーマンショックで嵐のようにうねる投資市場を切り抜けることも、この液体があつたからこそ成し遂げられたことだ。

コレがなければ、私はただの冴えないサラリーマンにでもなっていただろう。

これを手に入れたのは十五年前の事。

夏の熱い盛りの日、私は友達と連れ立って、近所にある廃工場

へと冒険に行った時のことだ。そこには近所の子供に有名な、呪文おじさんが住み着いているという噂があり、それを確かめに行ったのである。

大人から見ればただの浮浪者だったのだろう。だが、子供だからわかる、尋常でない（．．．）彼の雰囲気、彼を特別にしていたのだと思う。

加えて、その名前の由来となった呪文だ。

彼はいつも何かを探していたらしい。いや、なんでも良いから探していた、というべきなのだろうか。

呪文おじさんはいつもその廃工場から出てきて、街を歩きながらゴミとしか思えない物を袋に詰めて歩く。その袋が一杯になると持ち帰り、囁れた声でボソボソと、明らかに日本語や英語ではない呪文を唱えるという儀式を行うのだ。

彼がいったい何をしているのか。興味がわからない子供はいないだろう。

そこで、私と友人が周辺の子供を代表して調査に赴いたのだ。

「おい、いいか？ 俺はまず外を調査する。お前は中を見張って、呪文おじさんが出てきたら俺に知らせろ。いつも通りなら、今の時間はまだ中にいるはずだ」

当時は無理して、俺という一人称を使っていた私の言葉に、友人は任せてくれと胸を叩いた。

私は言葉通りに工場の周辺を見て回ったのだが、大して面白いモノが転がっているわけでもない。

呪文おじさんが持ち帰り損ねたらしいゴミがあたりに散乱していたが、私は軽く調べる程度で済ませるつもりだった。

しかし、それでも子供の足だ。廃工場は中規模の商業モールほどの大きさがあり、何かないかと注意を払いながら歩けば、外周だけで十五分近くかかる。

熱い日差しに汗がしたたり、こんな事が何になるのかと自問をし

始めた頃に、友人と離れた工場の入り口にたどり着いたのだが、不思議な事に友人の姿は見えなくなっていた。

その時に、聞こえたのだ。

『くふあ　く　ぶるうぐ　とうむ　ぶぐ　とら　ぐるん　』

肌の上を百足のような虫が這い回る悪寒。

聞いているだけで耳の奥までミミズを突っ込まれて潰されるような違和感。

呪文おじさんの『呪文』に、私は背筋を震わせる。

なぜだ？　いつもならばそろそろ外に出てくる時間で、呪文を唱えるのは帰ってきてからのはずだ。

それなのに、なぜ、今日に限ってこの時間に。

私は、自分にささやきかけてくる何かの声——おそらく理性と呼ばれるものの警告を押さえつけ、好奇心に誘われるがまま、工場の扉から中をのぞきこむ。

工場の床から壁面まで、真っ赤な塗料で何らかの紋様が書き連ねられた光景が広がっていた。いや、意味のある紋様ではないのかもしれない。計算されたような無造作が、そこには広がっていた。

その中心で、呪文おじさんが何かに祈るように呪文を唱え続けた。いた。

「あいああ　あいああ」

その呪文を唱えながら、まるで狂った様に踊り狂う。

私はとっさに、その光景の中に自分が飲み込まれそうになっていることに気がついて、目をそらす。

その熱狂は、まるで銀塩写真のように私の体と精神に焼き付いていた。

耳をふさぎ、目を閉じた上で、体を抱え込むように縮こまってどれだけの時間が経ったか。

いつの間にか、耳を塞いでもわずかに聞こえていた声が聞こえなくなっていた。

耳から手を離しても、何も聞こえない。

ただ、虫の声や、草が風に揺れて擦れる音だけとなっていた。

呪文おじさんはどうなったのか、私は抑えきれない好奇心に追い立てられるように、怯えながらも工場の中をのぞきこむ。

工場の中の様子はあまり変わらなかったが、踊り狂っていた呪文おじさんの姿が見えなくなっていることと、もう一つ違いがあった。私の隠れていた入口の影のすぐ近くに、硝子製の容器に入った液体があったのだ。

呪文おじさんに気を取られて見えていなかったただけの可能性もあるが、私はなぜかそれが、私のために置かれたものだという印象を受けた。

そこで私は、それを持ち帰ろうという事だけで頭が一杯になり、汗みずくになりながら家路へついた。

友人については、たいして心配していなかった。

比較的田舎にある私の故郷は、唯一の取り柄が治安の良さというくらいで、さらに廃工場も普通の遊び場のすぐ近くなのだ。何か用事を思い出して帰ったのだらうと、その時はそう思っていた。

もともと——それ以来、友人は今も、帰っていないらしい。

無事に帰り着いた私はその液体の美しさに魅入られ、馥郁たる甘い香りに酔いしれ、一口含んだ事でその効能を知り、虜となった。それから私は綿密に計画を立てて、貴重なその液体を使いながら人生を攻略し続けてきたのだが、それも残り少し。

「コレがなければ、私は破滅だ——」

自分の判断で億単位に及ぶ会社の金を動かすだけの能力は私にはない。

だが、最近買った成城の自宅や、会社の仲間と張り合って購入し

たベントのローンは、貯金をはたいたとしてもまだしばらく終わらそうにないのだ。

私は、残っていた数少ない液体を飲み、呪文おじさんを見つけたいと願う。

一口ではたりなかった。

探す事が難しい物は、それなりの量が無ければ効果がでない。

今までは小さじ程度の量で見えた事を考えると、呪文おじさんはずいぶんと代償の大きい捜し物だ。

二口。

液体の残りを見つめながら、私は可能な限りこぼさない様に口に含む。

そして、三口にしてようやく、私の精神は肉体を離れ、遠く離れたとある寒村で暮らす彼の姿を見つけるに至った。

改めて作ってもらう。

そうと決まれば話は早い。私は温泉旅行だと偽って妻を誘う。

「あなたと旅行するのも、もう何回目かしら。いつも、楽しませてくれてありがとう」

妻は楽しそうに、そして私は表面だけはそれに合わせて笑顔を見せながら、電車やバスを乗り継いでその寒村に赴いた。

そして、秘境の温泉だと言いながら、呪文おじさんのところまで導く。

呪文おじさんはあの頃と変わらないような姿で、まるで私があることを知っていたかの様に待っていた。

炯々と光る闇のような、不気味な色をした瞳が、私たちを見て、嗤う。

「寄こせ」

記憶より囁れた声に促され、私は、繋いでいた妻の手を離し、その背中を呪文おじさんに向かって軽く押す。

私は予想していたのだ。

あの友人はどうなったのか。

なぜ帰らなかったのか。なぜ、入口を見張っていたはずなのに姿を消したか。

なぜ、いつもならば袋が一杯になるまで街をうろつく呪文おじさんが、あの日に限って早々に儀式を始めたのか。

まるで、礼をするかのように、私のそばに置かれていたあの液体はどういう意味だったのか。

その袋を、私が連れてきた友人が一杯にしたからだ、大人になつて振り返った私は確信していた。

「あ、あなた？」

何が起こっているのか、この人は誰なのか。

問いかけるような言葉はでることなく、彼女の体は力を失った。

このために連れてきたのだ。あの液体が手に入る事も考えれば、惜しくはない。

次はもっと若くて美しい女を妻に娶ろうと、私は今からすでに計画を立てている。

なに、あの液体があれば、人間など簡単に操れる。

悲しい時、寂しい時、まるで王子様のように現れる私に、相手はきつと心を奪われずにいられないはずだ。

そんな事を考えている間に、バラ色に染まっていた妻の頬は次第に土気色に変わり、まるで、得体のしれない何かに命を吸われたかのような様子になっていた。

「すまん」

私は眉を寄せて、すでに聞こえていないだろう妻に呟く。

だが、どうにも、口元を手で抑えなければ、悲しげな顔には見えないだろうという自覚もあった。

あの液体さえあれば、恐る物も、悲しむ事もない。

歪む口元を抑える私をみることもなく、呪文おじさんは家の中へ入り、そこで、妻の体を引き裂いた。

そつだ。あの工場の床や壁を問わない模様は、こうして作られたのだ。

生身で人の体をちぎるという作業に、私は現実感を失いながら、昔とは違い一心不乱に呪文おじさんを見つめて、記憶する。

この儀式さえ憶えてしまえば、自分が望んだ時に作り出せるはずだからだ。

そして、呪文おじさんは妻の五体を用意していたらしい樽の中に入れ、他にもいくつかの薬や熱湯を注ぎ、ついに呪文を唱え始める。

『くふあ　く　ぶるうぐ　とうむ　ぶぐ　とら　ぐるん　』

あの時に聞いた、記憶の中の呪文と同じものが、今は目の前で唱えられている。

子供の頃の好奇心が、今ようやく満たされたようだと感じながら、私は彼の儀式が終わるのを今か今かと待った。

短いというほどでもないが、さほど待つ事もなく儀式は終わったらしい。

呪文おじさんは憔悴した様子で座り込み、息を整える。

私は期待に胸をときめかせながら、その樽の中身——私を成功へと導いたあの液体の出来栄を見るために、樽をのぞきこんだ。

しかし、中にあったのは、妻の肉片をはじめとし、投入された物と変わらないごつた煮だった。

「これは、どういうことだ！

なぜ、なぜあの液体にならない！！」

うるたえて掴みかかる私に、呪文おじさんは窓の外を指さす。

そこには——無数の死体の山が広がっていた。

「こ、れ、は」

あまりの驚愕に、言葉が一音ずつで途切れてしまう。

おそらく、この山とつまれた死体は、あの液体をまたつくろうとしていた跡なのだ。

いつの間にか、樽を抱えて外に出た呪文おじさんは、疲れた表情で、その中身を無造作に死体の山にぶちまける。

見た目は変わらない。

死体が、少し増えたただだ。

「うえ、ぶ、ぐ」

こみ上げてきた吐き気をこらえきれず、窓の外に向かって吐き出す。

いったい、何を間違った？

いったい、何が違ったのだ？

こうして私は、あの液体を失った。

元々平凡な能力しか持たない私は、超一流企業という環境の中ではカスも同然である。

会社はすぐに解雇され、家も、車も、失った。

あの液体で手に入れたものなのだ。それが無くなれば、失うのはまた当然の事。

そして、私はひとつだけ知った。

そういえば、妻だけは、あの液体で手に入れたものでは無かったと。

生きていれば、こんな私にでもついてきてくれたのだろうか。

今となつては、わからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6306q/>

液体

2011年2月4日01時34分発行